公開・非公開の別	■　公　開　□部分公開 □　非公開

令和３年度第３回(第 36 期)浜松市社会教育委員会会議録

１　開 催 日 時　　令和４年３月 16 日（水）午前 10 時～11 時 50 分

２　開 催 場 所　　浜松市役所本館８階　第３委員会室

３　出 席 状 況　　委　員　　伊藤豪委員、晝馬るみ委員（Zoom 参加）、河合亮子委員、中村朋子委員、鈴木一夫委員、屋名池倫子委員、白岩伸也委員、近藤潤子委員

事務局　　中村文化振興担当部長、久米生涯学習担当課長、中村生涯学習推進グループ長、遠部指導主事、井ノ口指導主事

欠席委員　　高木一徳委員、松本孝久委員

４　傍　聴　者　　２人（一般：０人、記者：２人）

５　議 事 内 容　　１　令和３年度事業実績について
（１）浜松市と大学の連携事業について
（２）令和３年度生涯学習人財育成事業について
２　表彰報告
３　令和４年度社会教育団体の補助金について
４　第 37 期社会教育委員会に向けて

６　会議録作成者　　創造都市・文化振興課生涯学習推進グループ
遠部佳代子、今井千晶

７　記 録 の 方 法　　発言者の要点記録
録音の有無　　無

８　会 議 記 録

１　開会
２　議事
（１）令和３年度事業実績について
①浜松市と大学の連携事業について
■事務局より資料１に基づき、浜松市と大学の連携事業について報告
■意見・感想、質疑応答

（鈴木一夫委員）
　オンライン開催も今年度で２回目となり、昨年より運営に余裕ができ、安心して視聴することができた。学生達も工夫しながら成果報告をしていた。
（河合亮子委員）
　講座開催にあたり、大学生の視点、協働センターの視点、受講者となる市民の方たちの視点、それぞれ少しずつ違うが、大学生たちは受講者に少しでも分かりやすい講座になるように、よく工夫をしている。それを協働センターの方たちがしっかりフォローをして、連携が取れていると感じた。そこに異世代交流が生まれ、学び合うことが多いと思う。講座に参加してよかったという受講者が多かったことは、収穫だと思う。
（屋名池倫子委員）
　和地協働センターで浜松学院大学の学生がブラジル料理を教える講座に参加した。料理をしたことのない学生が、四苦八苦しながら子供たちに一生懸命教えようとしていた経験は、とても勉強になったと思う。運営する協働センター側の意識をもっと高めると良いのではないか。講師となる大学生は、お客様ではなく、学び合うという立場であることを運営側が持っていないと、何の為にこの講座をするのか、大学生に伝わりにくいと感じる。大学生（大学）・協働センターでお互いに学び合う立場であることを、改めて確かめ合うことが必要だと感じた。
報告会では、昨年度より運営側や発表者である大学生たちが ZOOM に慣れたことで、聞きやすかった。チラシの広報の意見交換では、各大学がバトンタッチしながら意見を交流させ、大学同士がつながっていることを感じた。
（伊藤豪委員長）
　大学生は、学内において同年代の学生や担当の先生方との関わりがあるだけだが、この大学連携事業での活動は、一般の方たちや社会と関わる数少ないチャンスとなっている。そして、その数少ないチャンスの中で、自分の力が試されるいい経験である。講座を開催する大学生にとってのメリットは大きい。学生自身が、自分も社会の一員として何かをできるという自覚が持てる。今後もこの大学連携事業は続けていけると良い。今年は浜松医科大学も参加し、浜松市内全６大学により開催できたことは、画期的なことであったと思う。学生同士の交流がさらに生まれていくとおもしろい。その中で、さらに視野も広がっていくと考える。学生同士の交流がさらに広がっていくことに期待する。
（鈴木一夫委員）
　今までに２回大学連携事業の講座に参加したが、とても面白かった。今後、浜松市として、この事業をどの様に考えているか。
（事務局）
　継続を考えている。協働センター側が受け入れられる講座数と、大学側が提供できる講座数が 50～60 講座であり、バランスが取れてきた。講座の内容を改善しながら、大学側と連携して継続していきたい。成果報告会では、大学生同士の交流の場をさらに増やしていきたい。

②令和３年度生涯学習人財育成事業について
　■事務局より資料２に基づき、令和３年度生涯学習人財育成事業について説明
　■意見・感想、質疑応答
（中村朋子委員）
　チラシ作成の「生涯学習講師養成講座」を視察したが、参加者の熱気が伝わって

きた。７つの内容の講座を開催したということだが、講師として必要なスキルに焦点をしぼり、効果的な講座を開いたと思う。来年度は、「生涯学習講師養成講座」を「生涯学習講師スキルアップ講座」と名称変更することで、さらに参加者も高い意欲をもって参加するのではないか。学校運営協議会のメンバーになっているので、生涯学習講師登録者を把握している協働センターと学校との連携を進めていきたい。

（畫馬るみ委員）

コミュニティスクールの実践が進む中で、生涯学習を推進してくれる人をどれだけ増やすことができるかが、コミュニティスクール発展の要になるのではないか。「生涯学習講師スキルアップ講座」という名称に変更して、さらに参加しやすくなる。誰もが地域の中に講師として参加できるような仕組みになることを期待する。

（白岩伸也委員）

養成というと主体と客体の非対称な関係性があると思ったが、スキルアップに変更したことで関係性も変わるのではないか。チラシ作成の講座を視察した際に、豊富な人材がいることに驚いた。講師の人選に偏りがあると聞いたが、今後は名簿を活用しながら多様性と公平性の両面が保証できるシステムができればよいと思う。

（近藤潤子委員）

住んでいる地域の学校で４月からコミュニティスクールが始まるが、協働センターと学校の連携がより深まると良いと思う。知識を伝えたいという方と学びたいという子供たちとの、コミュニケーションの場になると良い。

（伊藤豪委員長）

地元の小学校の学校運営協議会の会長をしている。今後この生涯学習人財育成事業を発展させていくことは、とても重要なこととだと感じているので、興味深く見守っていきたい。事業のさらなる充実をお願いする。

（２）表彰報告

■事務局より資料３に基づき、第 74 回優良公民館文部科学大臣表彰、令和３年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰、令和３年度優良公民館等静岡県教育長表彰、令和３年度子供を育む地域活動団体県教育長表彰について報告

■北部協働センター佐藤拓男所長より事例発表

■意見・感想、質疑応答

（伊藤豪委員長）

今の日本社会を見ていると、若い人たちをいつまでも子供扱いしていると感じる。若い人たちに任せてやらせてみると、我々以上にすばらしいことができたり、思いつかないことをやってのけたりする。北部協働センターの取り組みはすばらしかったと思う。他の地域にも広げ、浜松市全体の動きになると良いと思う。

（鈴木一夫委員）

とてもすばらしい。なかなか知ることができない、協働センターの様々な取り組みを知った。若者たちをいつまでも子供扱いしているとういのは同感。自分の所属する施設（特別養護老人ホーム）で、学習塾に行けない子供たちに勉強を教える学習支援活動をしている。そこへ、浜松南高校の生徒たちが教えに来てくれている。その高校生たちには部活もあり、進学も控えているのだと思うが、一生懸命教えてくれている。機会さえあれば、社会のためにできることをやりたい人たちがたくさんいるのかもしれない。施設のボランティアもたくさんいる。関わりたくて仕方が

ない人たちがたくさんいる。そういった人たちが活動できる機会と巡り合うことが大切である。
（河合亮子委員）
北部協働センターの取組に共感するところがあった。生涯学習ボランティアで中学生・高校生のボランティア団体の運営に係わっているが、問題は継続すること。世代交代が必要である。自分は団体の会長を交代したが、今後どうやって世代交代をしながら続けていくかが課題である。継続は力なりというが、少しずつでも継続することが大切である。学校と家庭の往復だけでは社会性は育たない。それ以外の居場所として、協働センターがあり、団体があり、様々な大人と関わることで、居場所ができ、成長できる。特に不登校の子は、学校と家庭の往復だけでは、居場所がなくなる。協働センターや地域が協力して、子供たちをつなげて欲しい。
（白岩伸也委員）
北部ジュニア公民館に不登校の子が参加しているのはなぜか教えて欲しい。協働センターでの活動であっても、学校の友達が参加している可能性がある以上、参加しづらい子もいるのではないか。それでも参加しているのはなぜなのか。
（佐藤所長）
やりがいがあるのではないか。我々としては、参加してくる子供が不登校であるかどうかは分からない。分からないまま接している。何か問題を抱えているであろうことは感じるが、不登校かどうかは分からない。したがって特別扱いはせず、他の子供たちと変わらず、普通に接している。
（河合亮子委員）
自分の所属する団体では、浮いている子がいると大人がすぐに気づいて声をかける。同級生の中に居場所が作りづらくても、大人の中で居場所ができていく。
（伊藤豪委員長）
ずっと同じレールの上に乗っていると、息苦しくなり不登校になるのではないか。そんな時に協働センターには別の世界があり、居場所が見つかる。不登校対策にも良いのではないか。
（白岩伸也委員）
参加する子供が不登校かどうか知らないということが、むしろ良いのではないか。その子にとって解放の場になっている。日本語講座（BATE・PAPO）もすばらしいと思った。日本語の指導においては、指導者側と生徒側の関係性が一方通行になりがちだと思うが、教える側も学び、成長をしながら続く相互性が生まれていることがすばらしい。

（３）令和４年度社会教育団体の補助金について
■事務局より資料４に基づき、社会教育団体の補助金について説明
■意見、質疑応答なし
（伊藤豪委員長）
社会教育団体への交付補助金について承認させて頂く。

（４）第 37 期社会教育委員会に向けて
（畫馬るみ委員）
地域全体が、豊かになってゆくためには、世代間交流が大切。世代間交流を更に

進めるためにはどのような取り組みが良いかをテーマにして欲しい。
（白岩伸也委員）
　不登校の話もあったが、マイノリティとよばれる様々な人たちに対して何ができるかを考えていきたい。
（屋名池倫子委員）
　講座の申込方法で、２次元コードの利用が進んでいるが、誰でも簡単に申し込めるよう、さらに活用をしていってほしい。
（河合亮子委員）
　大学との連携事業は、続けて行って欲しい。とても良い事業で、浜松市の特徴にもなっていると思う。「気軽に♪生涯学習ボランティア講座」等、講座等の名称の変更をし、固い感じではなく参加してみようと思えるものに変更をしたように、様々な工夫をして、生涯学習への参加者増加につなげて欲しい。
（近藤潤子委員）
　社会教育を通じて、若い世代のリーダー育成を進めたい。若い世代の力を地域で発揮できる生涯学習の講座等が増えていくと良い。もっと協働センターの成功事例を知り、その取り組みを広げ、それを各地域で取り入れて行けると良い。
（鈴木一夫委員）
　大学との連携事業は、みんな生き生きと活動していてとても良いと思うので続けて欲しい。協働センターでの活動は、車や自転車に乗れる人しか参加できない。参加できない人達は各町にある集会場に集まって活動しているが、高齢化で上手くいってない。そこに地域の誰かが関わることが必要。今は民生委員がその役割を担って行っているが、協働センターでの成果が、各地区にも生かせていける様になると良いと思う。
（中村朋子委員）
　中学生が積極的に生き甲斐をもって、参加しているのはすごいと思う。そして小学生の時に生き生きと活動している中学生を見て、中学生になって参加している。社会に参加する経験は、その年代年代で経験することが大切である。地域に関わりたいと思う子供たちを育てる事業がもっとあると良いと思う。
（伊藤豪委員長）
　高齢化が進み、協働センターに行ける人は限られてしまう。協働センターでのすばらしい取り組みが、さらに小さい単位においても広がっていけばよいと思う。

３　連絡事項
■事務局から以下の内容について連絡
・配布物について説明
（第 52 回関東甲信越静社会教育研究大会冊子、社教会報№89・90、大学連携報告書、北部協働センター冊子、科学館館内 MAP、COMPASS）
・次回開催予定
令和４年６月予定

４　退任委員挨拶
尾名池倫子委員、河合亮子委員、鈴木一夫委員より挨拶

５　伊藤豪委員長退任挨拶

6　中村文化振興部長より挨拶

7　閉会